

Title	社会福祉学の原理としての「存在」：人間本来の尊厳を露わにする「存在」の探究
Author(s)	中村, 剛
Citation	臨床哲学. 12 P.59-P.70
Issue Date	2011-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/4141">http://hdl.handle.net/11094/4141</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 社会福祉学の原理としての「存在」

## —人間本来の尊厳を露わにする「存在」の探究

中村剛

### 1. はじめに

知的障害者更生施設（現在では障害者支援施設）で生活指導員をしていたときの経験である。筆者はAさんのトイレ介助をしていた。現場の様子をみにきた施設長が筆者に向かって、「Aさんは、しゃべれず、目も見えず、歩くこともできないのに、生きていて楽しいのだろうか」と問いかけた。悪意はなく素朴な問いだったと思う。しかしこの問いは、心身に重い障害をもったAさんの存在を否定しているように感じ強い抵抗を覚えた。

しゃべれない、見えない、歩けない、IQは測定不能であろうとなかろうと、「一人ひとり人は大切な存在なんだ」という思いが、社会福祉という営みにはある。社会福祉が対応する様々な問題は、必ずしも改善・解決ができるものばかりではない。それ故、時に無力感を覚える。それでも支援し続けられるのは、そこに「人は大切な存在なんだ」という思いがあるからである。この思いや感覚は、今日では尊厳という言葉で言い表されている。そして、京極（1995：24）が「人間の尊厳→基本的人権→福祉権（自立支援）」という論理が存在していることが明らか<sup>1</sup>というように、尊厳という概念は福祉実践を支えるだけでなく、法制度としての社会福祉の原理としても位置づいている。

しかしながら今日では、子どもの貧困<sup>1</sup>、湯浅（2008：59-62）が指摘するような5重の排除により居場所そして命まで失ってしまう人びとに象徴されるように、人としての尊厳を喪失している人びとが大勢いる。言い換えれば、人としてまったく大切にされず、放っておかれている人びとが目に見える形で広がっている。

社会福祉という営みは、経済的要因、政治的要因、社会的規範と価値観、そして財政的要因という外側からその在り方が規定される。しかし、そのような外的要因に抗し、社会福祉法が理念で掲げる一人ひとりの「尊厳の保持」を実現するために必要なことは、地域で暮らす人びとが実感をもって理解できる尊厳概念を見出すことである。それは、先に述べたような「人は大切な存在なんだ」という経験の理解を可能とするものでなければならない。

このことを可能にするものこそが社会福祉学の原理ではないか<sup>2</sup>。そして、それは「存在」ではないか。これが本稿における仮説である。

この仮説を論証するため手順は次の通りである。本稿における存在理解はハイデガーの存在論に依拠する。よって最初に、ハイデガーの存在論を導入する理由を述べる(Ⅱ)。次に、仮説を論証する上で必要となるハイデガーの存在論を整理する(Ⅲ)。続けて、存在が社会福祉の原理として求められる理由を述べる(Ⅳ)。その上で、存在が「人間本来の尊厳」を露わにする社会福祉学の原理となることを論証する(Ⅴ)。

## Ⅱ. ハイデガーの存在論を導入する理由

### 1. 世界との関係性と根源性

社会福祉が実際に関わる人びとは、歴史や地域から遊離した抽象的な人間ではなく、様々な歴史・地域の中で暮らす具体的な人びとである。例えば、地域には障害児を抱えた親がいる。その親は「私たちが死んだらどうするのか」と洩らす。その言葉には「差別と抑圧と疎外の歴史の重層性が一人ひとりの親と子の生の現実に凝結している」(小倉 1980 : 163) ことが示されている。

様々な経験を根源的な地点から理解するには、大別すれば次の2つの立場がある。1つは、自らが経験しているこの世界の外部に視点をもつ認識主体を設定し、その視点から人間と世界との根源的関係性を捉え、そこから自らの経験を対象化して認識する理論的立場である。この立場では、認識主体と自らが経験している世界が遮断され、自らが経験している生活／生が疎外される。もう1つは、人間は世界という総体の外部に出ることはできず、常に／既に世界の中に存在する存在者であり、そのような存在者の視点から人間と世界との根源的関係性を捉え、自らの経験を理解する歴史的／実践的立場である。この立場では、自らが経験する生活／生がリアリティをもって理解することが可能となる。

「人は大切な存在なんだ」と思う経験を始め、社会福祉における様々な経験を根源的な地点から理解するには、歴史的／実践的立場に立つことが必要である。この立場から理解される人間を現存在(後期では現-存在)という言葉で示したのがハイデガーの存在論である。

ハイデガーは、「我々の生は、我々の世界なのである」(Heidegger =2010 : 33) という言葉が示すように、世界と共にある自己を現存在と呼ぶことで、対象化された知識とし

ての世界ではなく、私たちが現に生きている現実の世界と自己の関係性を言い表そうとした。小柳（2006：246）はこのことを「ハイデガーは初期から一貫して世界との共属を取り戻す為、『自己』そのものに立ち返り、『自己』のうちに『世界』を見た。これが『現存在』と呼んだ真の意図」と指摘している。

社会福祉における様々な経験を外側から理解するのではなく、可能なかぎり内側から理解するためには、現存在という視点から人と世界の根源的關係を捉えるハイデガーの存在論が必要である。これがハイデガーの存在論を導入する1つめの理由である。

## 2. 思考における根源性

社会福祉学の原理とは、社会福祉という営みの理解を可能にする根源にあるものである。それは一般的には、認識の源泉と理解される。しかし、認識という言葉自体、社会福祉や世界の外部に認識主体を想定し、認識主体が社会福祉や世界を客観的に認識し、ひいてはコントロール（管理）するという思考の枠組みの中にある。これは理論的な立場、すなわち、人間と世界が遮断された関係である。

嶋田（1980:39）が「科学的認識方法における客観化主義は、人間をも『客体』（object）として、対象的に捉え、その主体的側面を没却するに至った」と警告するように、理論的立場では、社会福祉という営みにおける様々な経験を生の実感をもって理解することはできない。

社会福祉という営みの理解を可能にする根源にあるものは、認識の源泉ではなく、人間一人ひとりによって了解されている世界が構成される場ないし働きである。このような場ないし働きを社会福祉学の原理とすることで、社会福祉という営みにおける一人ひとりの経験を、生の実感を伴う形で理解することが可能となる。そのような場ないし働きを「存在」と捉えたのがハイデガーである。それ故、ハイデガーの存在論が必要となる。これが2つめの理由である。

## 3. 尊厳への思索

実践と制度の双方において尊厳という概念が社会福祉の原理にある。それ故、社会福祉学は尊厳という概念についての理解をもたらす知でなければならない。

尊厳は人間の人間性（本質）を表す概念として生まれ用いられてきた。尊厳は英語の dignity の訳であるが、この言葉の使用は、古代ローマで使われていたラテン語の

dignitas までさかのぼる。この言葉が確認できる最古の文献はストア学派の一人キケロの『義務について』であるとされている。そこでキケロ (Ciceronis = 1999 : 188-189) は、自然の欲求をコントロールする理性こそが、他の動物には見られない人間固有の優越性であり、それを人間の尊厳と捉える。中世になると尊厳は、人間と動物の質的差異を表す言葉として用いられた。その根拠となったのが『旧約聖書』創世記 (第 1 章 第 27 - 28) である。そこでは、人間は他の被造物とは異なり「神自身に似せて造る」という特異な造られ方をされていること、他の動物にはみられない格別の価値が与えられていることが語られている。この神から与えられた格別の価値が尊厳である。近代哲学においては、人間が持つ合理性、非固定性、主体性 (自律性) といった人間が持つ普遍的性質から尊厳が理解された<sup>3</sup>。

これら人間の人間性 (本質) を理性的存在とみなすようなヒューマニズムは、人間本来の尊厳を見ていない。そのため、そのようなヒューマニズムに反対して思索し、人間本来の尊厳を露わにしたのがハイデガーである。人間の人間性 (本質) を理性的存在とみなし、そこに人間の尊厳を認めるようなヒューマニズムでは、理性的能力を持ち合わせていない、冒頭で示したような障害をもった人たちの尊厳を基礎づけることはできない。

人間の人間性 (本質) を理性的存在とみなすようなヒューマニズムや、単に人間であるだけで尊厳があるというヒューマニズムとは異なり、存在へと身を開く中で経験する存在重視のヒューマニズムが本当のヒューマニズムであり、そこにおいて人間本来の尊厳を理解することができるとしたのがハイデガーの存在論である。

「人間は大切な存在なんだ」という思う経験を、人間本来の尊厳として理解することを可能にするのがハイデガーの存在論である。これが、ハイデガーの存在を導入する 3 つめの理由である。

### III. ハイデガーの存在論

#### 1. 存在論的差異と現存在

ハイデガーは『存在と時間』の第二節で「存在するものの存在は、それ自身、ひとつの存在するものでは『あり』ません」(Heidegger = 1960 : 25) と明確に区別している。この区別は翌年の講義である『現象学の基本諸問題』(全集第 24 巻) の第 2 部 第 1 章に「存在論的差異の問題」(日本語訳では「オントローギッシュな差異の問題」) として明示され

ている。

存在は存在者ではないため、「それは～である」と答えることはできない。「それは～である」という形で理解されるものはすべて存在者である。しかしながら、われわれ人間は、漠然とはあるが存在について了解している。われわれ人間はふと気づくと、「現に・いま・ここで」存在していることを了解している。このようなあり方をしている人間存在のことをハイデガーは現存在という。この現存在は「私がこの概念を用いる場合には、私だけが現存在と呼ばれうる唯一のものであって、あなたや彼や彼女は『共現存在』であっても『現存在』そのものではない」（仲原 2008：45）。

## 2. 存在のあり方

### (1) それ（存在）—言葉—人間—世界

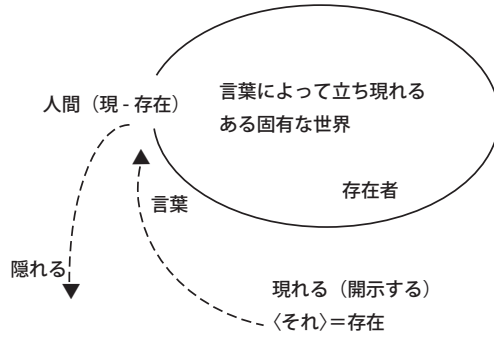
ハイデガーは『「ヒューマニズム」について』において「この存在とはいったい何であろうか。それは、それ〔存在〕そのもの」（Heidegger = 1997：58）であり、もっと正確に言えば「存在は『それが与える』ものである」（Heidegger = 1997：66）という。この点について渡邊（1997：278-9）は「要するに、存在が自分を『与え（geben）』、『送り届けてき（schicken）』、そこに『明けた明るみ（Lichtung）』、『存在の投げ（Wurf）』、『存在の運命（Seinsgeschick）』が成立し、人間に対する『呼び求める促し（Ereignis）』、『語りかけの要求（Anspruch）』が発せられ、ついにそれが『言葉』という『近さ（Nähe）』において迫ってき、そこに『存在の歴史に即した（seinsgeschichtlich）』諸時代も成立するわけである」と解説している。

### (2) 現われと隠れ

しかし、それ（存在）は与えるだけでなく、「〈それ〉〔存在〕は、みずからを与えるとともに、また同時に、みずからをも拒む」（Heidegger = 1997：70）。すなわち、仲原（2008：399）が『『存在そのもの』を思考することは、存在を空虚さの開示性と豊かさの覆蔵性との共属において思考することでなければならない』というように、「それ」（存在）は与える（開示する）と同時に、みずからを隠す働きをもつ。このような存在の働きが「存在する」ということなのである。そして、「存在するとは、ある固有の世界を形成するということそのもの」（轟 2007：344）なのである。

以上で確認した存在の働きを「存在のあり方」として図で表すと図1となる。

図1 存在のあり方



### 3. 人間本来の尊厳

ハイデガー (= 1997 : 56) は「人間の本質に関する最高のヒューマニズム的諸規定でさえも、人間の本来の尊厳をまだ知ってはいない」という。では、人間の本来の尊厳とは何か。それは『『存在へと身を開き—そこへと出て立つあり方』に立脚する存在重視のヒューマニズムが、ほんとうのヒューマニズム』(Heidegger = 1997 : 91) である。すなわち、「われわれに存在を贈り、われわれを包み込み、足元を支える存在に耳を澄まし、こうして存在の『開示性』に身をゆだねることこそ、人間の尊厳」(貫 2007:129) である。これは「存在を隠蔽し、存在者を支配し、自分自身の存在のあり方にすべてを賭けるような人間中心主義とは異なる、存在に贈られた人間の尊厳」(貫 2007 : 129) なのである。

## IV. 社会福祉学の原理としての存在

### 1. 社会福祉学の原理

社会福祉学の原理とは、社会福祉という営みの理解を可能にする根源にあるものである。このような原理に言及した上で、社会福祉学の構築を試みたのは岡村重夫ただ一人である。岡村には「もし、認識の原理がなければ、そこにあるものは混沌たる無規定の社会現象の堆積でしかない。目がなければ物は見えない。一定の認識の原理があればこそ、そこに一定の意味を発見することができるのである」(岡村 1983 : 68-69) という言葉が示すよう

に、認識の原理（源泉）にまで遡って社会福祉学の原理を考えようとする視点および動機がある。

社会福祉以外の生活を支える仕組み（社会保障制度）が、社会関係（個人と制度との関係）の客体的側面から生活者を捉えるのに対して、社会福祉は社会関係の主體的な側面から、すなわち、生活主体者の立場から生活困難を理解する。そして、この立場から社会福祉学を構築していこうとしたのが岡村の社会福祉学である。

## 2. 認識の源泉から存在の理解へ

岡村の視点、すなわち、生活主体者の視点を継承し深化させるために必要となるのが、社会福祉学の原理についての理解を、「認識の源泉」ではなく「存在の理解」と捉えることである。認識の源泉は、世界と人間の根源的關係でいえば理論的な立場である。この立場では、人びとの経験そして自らの経験を外部の視点から対象化して理解するため、経験についてリアリティをもって理解することは難しい。

人びとの経験そして自らの経験に対してリアリティをもって理解するためには、歴史／地域（世界）の内に存在している人びと（現存在）の立場から、一人ひとりの人が生きている現実を理解する歴史的／実践的立場が必要である。この歴史的／実践的立場に基づく社会福祉学の原理が「存在の理解」である。

## 3. 存在が社会福祉学の原理として求められる理由

存在とは図1に示されているように、「一人ひとりによって了解されている固有な世界」が構成される場ないし働きのことである。この場ないし働きを理解することが、社会福祉という営みの理解を可能にする根源にあるものであり、社会福祉学の原理としての存在である。

社会福祉学の原理を存在と捉えたとき、「なぜ私に、このような世界が与えられているのか」という問いを、社会福祉学における問いとして考えることができる。これは一見抽象的な問いに見えるが、社会福祉の営みにおいては切実な問いである。北川（2001：94）は「世間一般の（と自分には思われた）幸福なありかたとは縁が切れ、なぜ私だけがこのように存在しているのか、自分を襲った出来事の背後にひそむ理由を白日のもとにひきずりだしてみないではいられない気持ちだった」というが、社会福祉という営みには、このような気持ち、問いが潜んでいる。



例を示そう。「なぜ、自分はこんなに重い身体の障害をもって生まれてきたのだろうか」(障害者支援施設で発せられる問い)、「なぜ、うちの子が小児ガンに」(医療ソーシャルワーカーに向けられる問い)、「自分は社会のお荷物。自分なんか生まれてこなければよかった」(福祉事務所、あるいは貧困対策に取り組むNPOの活動の中で聴かれる声)。これらは、「なぜ私に、このような世界が与えられているのか」、「なぜ私に、そもそも世界が与えられたのか」といった存在に関する問いである。

存在を社会福祉学の原理としたとき、このような根源的かつ切実な問いについて考えることが可能となる。そして、次章で述べるように「一人ひとりの人間は例外なく大切な存在であり、その生は生きるに値するものであるという思い」に対して、一人ひとりの人が実感を伴って理解できるような論理そして言葉や思想を得ることが可能となる。これらのことが、存在が社会福祉学の原理となる理由である。

## V. 存在の論理／経験の意味／言葉・思想

社会福祉学の原理となる存在には、「反転のロジック」とでもいうべき論理がある。そして、この論理によって理解される経験の意味があり、その意味を表す言葉・思想がある。ここでは、この一連の流れを説明する。そしてこの説明をもって、存在が「人間本来の尊厳」を露わにする社会福祉学の原理となることを論証する。

### 1. 反転のロジック（存在の論理）

社会福祉学の原理を存在と理解することは、社会福祉における様々な経験を「一人ひとりによって了解されている世界が構成される場ないし働き」から理解することである。この存在には反転のロジックがある。

仲原（2008：386）は「存在者が『かつては存在しなかったし、将来いつか存在しなくなることもありうるにもかかわらず、現在においては現実に存在する』ものとして現前してくる時、それまでまったく平凡で自明な事柄であった存在者の存在が、一転して『不可思議中の不可思議』として、真に驚くべき豊かさをもった事柄として経験される」という。すなわち、存在者の存在は驚き・不思議として経験される。この経験をハイデガーは「有るものの不思議、すなわち有るものがあるということ」(Heidegger = 1990:205)、「不可思議とは他でもない。そもそも一個の世界が、われわれをめぐって働き支配していること、

有るものがある、無があるのではむしろないこと、事物があり、われわれ自身がそれら事物の真只中にあること」(Heidegger = 1989 : 88) と述べている。

すなわち、存在しなかった可能性の方が遥かに多いのに、また、いつ亡くなる(無くなる)かも分からないにもかかわらず、今こうして在ることの不思議(奇蹟)に気づくこと、これが反転のロジックであり存在の論理である。

## 2. 世界が存在していることの意味

「存在者の存在」が「真に驚くべき出来事として経験されるのは、存在者の非存在がリアルに経験されている時」(仲原 2008 : 386) である。すなわち、存在しなかったかもしれないこと、あるいは、死ぬかもしれないことがリアルに経験される時である。この時、世界が存在しているという存在に触れる経験をjする。末期がん患者となった高見順や井村和清の以下の文章は、存在に触れる経験をありありと表現している<sup>4</sup>。

「電車の窓の外は／光にみち／いきいきといきづいて／この世ともうお別れかと思うと／見なれた景色が／急に新鮮に見えてきた〔中略〕この世界は実にしあわせそうだ／それが私の心を悲しませないで／かえって私の悲しみを慰めてくれる〔中略〕胸に感動があふれ／胸がつかまって涙がでそうになる」(高見 2004 : 62-3)

「その日の夕暮れ、アパートの駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ました。世の中がとても明るいのです。スーパーへ来る買い物客が輝いてみえる。走り回る子供たちが輝いてみえる。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小石までもが輝いてみえるのです。アパートへ戻ってみた妻もまた、手を合わせたいほどに尊くみえました」(井村 1980 : 137-8)

これだけではない。仏教には「人の生を受くるのは難く、やがて死すべきものの、いま命あるは有り難し」(法句経 182 番) という言葉がある。「有り難し」とは、いのち(生)あることがいかに奇跡的な出来事であるかに目覚め、驚き、感動した気持ちを表したものである。このように、反転のロジックは、有り難さ(感謝)を伴うこともある。

「無くて当たり前、にもかかわらず、こうしてあることの奇蹟」という反転のロジック(存在の論理)が、この世界があることのかげがえのなさ、有り難さ、大切さという「私たち一人ひとりに世界が存在していることの意味」を露わにしてくれる<sup>5</sup>。

### 3. 世界が存在している経験を表す言葉・思想

私たちは、存在している物事の間で比較し、そこに価値を見出そうとする。しかし、それとは異なり、無（生まれてこなかったことや死）との対比により照らし出され、そして無根拠（この私に世界が与えられている根拠などなく、むしろ与えられなかった方が当たり前であること）にもかかわらず在るという存在の論理が示す「存在の豊かさ」がある。それが「存在という事象そのもの経験」であり、その経験における意味が生の輝き、かけがえのなさ、有り難さ（感謝）である。そして、存在が開示する世界（場所）の輝き、かけがえのなさ、有り難さに身を委ねるときに感じられる「人間（かけがえのない世界）は大切な存在なんだ」という思いを表す言葉・思想が「人間本来の尊厳」なのである。

人間本来の尊厳についての理解を可能とする存在こそが、社会福祉学という学知の根源にあるもの、すなわち、社会福祉学の原理であると考えている。

## VI. おわりに

「存在」という原理が、普段私たちが忘却している、人間一人ひとりに与えられている（開示されている）固有の世界があることへのかけがえのなさ、尊さ、有り難さを露わにしてくれる。これらに身を委ねるところに人間本来の尊厳がある。岡村の主体性の原理をさらに徹底したときに見えてくる光景は、この人間本来の尊厳であろう。そして、それに気づかせてくれるのが「存在」という社会福祉学の原理である。

冒頭で述べた「しゃべれない、見えない、歩けない、IQは測定不能であろうとなかろうと、『人は大切な存在なんだ』という思い」は、人間本来の尊厳からもたらされる感情であり、その事を露わにしてくれるのが「存在」という社会福祉学の原理なのである。

しかしながら、社会福祉学の原理はこれだけではない。「存在」の彼方である「他者」も、もう1つの社会福祉学の原理としてある。このことは稿を改めて論じたい。

## 注

- 1 子どもの貧困については、浅井・松本・湯澤編（2008）、子どもの貧困白書編集委員会編（2009）を参照。
- 2 筆者は、このような意味における社会福祉学の原理を探究するのが福祉哲学であると考えている。しかし同時に、元来の哲学は経験をフレーム化する（捉える枠組みを作る、定式化する）ものであり、

臨床哲学は、人々の具体的なフレーミング（広い意味で哲学的な、つまり真理や規範にかかわるような表現）をサポートすることで、経験の始源性を取り戻す試み（中岡 2010：174-5）であるとするならば、本稿の試みは臨床哲学の一環でもあると考える。

- 3 Bayertz,K (= 2002：152-6) 参照。
- 4 末期がん患者が、必ずしも高見や井村のような経験をやる訳ではない。2000 人以上のがん患者を看取った経験を持つ佐々木（2009：84）は「特に若い患者さんの死は、表面上はあたかも受容しているように見えても、実際は『どうしても生きてかった』と思いながら亡くなられた方がほとんどなのです」という。人は生きたい、死にたくないのである。それ故、末期がんで余命いくばくも無いと告げられた場合、風景はむしろセピア色になる（佐々木 2009：169）人がほとんどであろう。高見や井村のような経験には、この生（世界）があることが稀有なこと（存在神秘）への気づきが必要である。
- 5 古東哲明はハイデガーの存在を、この世界があることに何の根拠も必然性もなく、むしろ無くて当たり前だったにもかかわらず、むしろ、そうであるが故に、この世界があることは奇跡・不思議であり（反転の論理）、そこに、この世界は唯一回切りのかけがえのないものが感じられること（ハバックスの論理）、また、〈死ぬ思い〉に浸潤されたときに経験される生の輝き・尊さ（クワシ・ウルシマ）、と読み解いている。本稿における存在の論理および存在に関する理解は古東（1992、2002）に依拠している。但し、感謝という観点は筆者が付け加えた解釈である。

## 文献

- 浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編（2008）『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店。
- Bayertz, K. (1995) *Die Idee der Menschenwürde: Probleme und Paradoxien, Archiv für Rechts-und Sozialphilosophie*, Vol.81,H.4,S.465-481. (= 2002, 吉田浩幸訳「人間尊厳の理念—問題とパラドックス—」山内廣隆・松井富美男監訳『ドイツ応用倫理学の現在』ナカニシヤ出版, 150-173).
- Ciceronis,T. (1994) *De Officiis*. Winterbottom. M.ed.M.Oxford.(= 1999, 中務哲郎・高橋宏幸訳『キケロー選集9』岩波書店).
- Heidegger, M. (1935) *Sein und Zeit*. Unveränderte 4.Auflage, Max Niemeyer Verlag,Halle a.d.S. (= 1960, 桑木務訳『存在と時間（上）』岩波文庫).
- Heidegger, M. (1947) *Über den 《Humanismus》. Brief an Jean Beaufret. Paris*, Verlag A.Franche AG.,Bern. (= 1997, 渡邊二郎訳『「ヒューマニズム」について—パリのジャン・ボーフレに宛てた書簡』ちくま学芸文庫).
- Heidegger, M. (1982) *Martin Heidegger Gesamtausgabe II. Abteilung;Vorlesungen 1923-1944.Band 52 : Hölderlins hymne“Andenken”.Freiburger Vorlesung Wintersemester 1941-42*, Hrsg.von Curd Ochwadt.Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. (= 1989, 三木正之,ハインリッヒ,トレチアック訳『ハイデッガー全集 第52巻 ヘルダーリンの賛歌「回想」』創文社).

- Heidegger, M. (1984) *Martin Heidegger Gesamtausgabe II. Abteilung: Vorlesungen 1919-1944, Band 45. Grundfragen der Philosophie. Ausgewählte "Probleme" der "Logik". Freiburger Vorlesung Wintersemester 1937-38*. hrsg. von Friedrich-Wilhelm von Herrmann, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. (=1990, 山本幾生, 柴嵩雅子, ヴィルクルンカー訳『ハイデッガー全集 第45巻 哲学の根本的問い—「論理学」精選「諸問題」—』創文社).
- Heidegger, M. (1993) *Martin Heidegger Gesamtausgabe II. Abteilung: Vorlesungen 1919-1944, Band 58. Grundprobleme der Phänomenologie, 1919-20*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. (=2010, 虫明 茂 / 池田 喬 / ゲオルグ・シュテンガー訳『ハイデッガー全集 第58巻 現象学の根本問題』創文社).
- 井村和清 (1980) 『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ—若き医師が死の直前まで綴った愛の手記』祥伝社.
- 北川東子 (2001) 『『存在の意味への問い』との出会い』木田元編『思想読本3 ハイデッガー』作品社、94-96.
- 子どもの貧困白書編集委員会編 (2009) 『子どもの貧困白書』明石書店.
- 古東哲明 (1992) 『〈在る〉ことの不思議』勁草書房.
- 古東哲明 (2002) 『ハイデッガー—存在神秘の哲学』講談社現代新書.
- 小柳美代子 (2006) 「〈場〉としての人間—ハイデッガーと西田哲学とを起点に—」ハイデッガー研究会編『ハイデッガーと思索の将来—哲学への〈寄与〉—』理想社、243-263.
- 京極高宣 (1995) 『社会福祉学とは何か—一新・社会福祉原論』全国社会福祉協議会.
- 仲原孝 (2008) 『ハイデッガーの根本洞察—「時間と存在」の挫折と超克』昭和堂.
- 中岡成文 (2010) 「第2部 動きを／動きながら 2. 知ること／動くこと」鷲田清一監修／本間直樹・中岡成文編『ドキュメント 臨床哲学』大阪大学出版会、167-177.
- 貫成人 (2007) 『入門・哲学者シリーズ4 ハイデッガー—すべてのものに贈られること：存在論』青灯社.
- 小倉襄二 (1980) 「第6章 市民福祉の思想—抵抗としての仮説」嶋田啓一郎編『社会福祉の思想と理論—その国際性と日本的展開』ミネルヴァ書房、161-183.
- 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』全国社会福祉協議会.
- 佐々木常雄 (2009) 『がんを生きる』講談社現代新書.
- 嶋田啓一郎 (1980) 「第1章 社会福祉思想と科学的方法論」嶋田啓一郎編『社会福祉の思想と理論—その国際性と日本的展開』ミネルヴァ書房、3-64.
- 高見順 (2004) 『詩集 死の淵より』日本図書センター.
- 轟孝夫 (2007) 『存在と共同—ハイデッガー哲学の構造と展開』法政大学出版局.
- 渡邊二郎 (1997) 「(二) 個別的記注」マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳『「ヒューマニズム」について—パリのジャン・ポーレフに宛てた書簡』ちくま学芸文庫、218-312.
- 湯浅誠 (2008) 『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』岩波新書.